

古典ギリシアにおける一般教育と哲学

「ゴルギアス」を中心とした一考察

第I部 一般教育の伝統的理念とソフィズム

永 野 善 治

目 次

はじめに	1
1 アテナイ社会の伝統的特質とその変動	4
2 伝統的人間観とその推移	11
3 一般教育とソフィズム	16

はじめに

近年来の学園紛争を契機として提起されてきた「一般教育」の問題は、ここ1・2年間に見られた大学各自の予備的摸索の段階をこえて、ついに、本格的な大学改革の第一歩として大幅な改善策が示され、昭和46学年度からの実施が文部省から通達されるにいたった。

このような時のしるしに呼応して、大学教育全般において占めるべき一般教育の役割を明確に把握すること、それにあわせて教育課程改善に向けて効果のある具体的作業を精力的に推進することは、ただ一般教育科目の担当者ばかりでなく、大学教育当事者全部によせられた重要な課題であるといわなくてはならない。あわせて、わが沖縄大学は現在緊急の問題とし

て、復帰を目前にしその存続がかけられており、内外の多くの難問に直面せざるをえない立場におかれている。

このような状況のもとで、表題にかかげたようなテーマの本稿が、現下の緊急な要請とどこでどのように結びつくかは、必ずしも明白だとは言いがたい。しかしながら、一般教育科目の哲学を担当する者として、哲学が、つねに源流にさかのぼっての考察をもつものとされているからには、現況に対処する一つの道をもたなければならないと考えるのである。すなわち、「高等教育」については、その淵源と目される古典ギリシア末期のアカデミアにまでさかのぼり、「哲学」をもその本源においてとらえ、当時の社会における「一般教育」との関連を考察し、そのような状況下で哲学が何を課題として考え、どんな対処のしかたをもって社会への貢献を意図したかについて、深い関心をよせざるをえないのである。

さいわい、筆者には、沖縄大学への就任以来研究助成費の交付を受けて続けてきた研究があるので、この機会にその一端を提示して学的批判を仰ぎたい、と念ずるものである。

本論に進むまえに、「ゴルギアス」についてすこしくふれておく必要がある。プラトン研究者によれば、「ゴルギアス」は、年代的に分けられる彼の著作の三つのグループのうちで初期のものに属するとされ、その年代は、だいたい前 399年から前 384年にわたる、とするのが定説のようである。⁽¹⁾

前 399年といえ、⁽¹⁾「ソクラテスの死」の年であり、プラトンがのちに「目がくらむ思い」と表現したような心情をもって師の死をみつめ、師の言行がさし示していた「哲学」との関係において、自己の生涯の仕事は何かという問題意識を尖鋭化させていった時期の始まりである。つぎに、前 384年は、プラトンが生涯の目標とした「政治の実践」がソクラテスの死によって大きな衝撃をうけてアテナイの民主体制に絶望感を抱きつつも、実際政治への参加の念やみがたく、メガラ、北アフリカ、南イタリ

ア、シシリー島などを遍歴した、いわゆる第1回シケリア行、の時期と重なっており、しかも、この旅行から帰ったプラトンは、齢ようやく40歳代に達し、アテナイ郊外に「アカデメイア」を開設して組織的な研究と教育活動に専念する時期に接続しているのである。つまり、西欧最初の高等教育機関としてそれ以降の大学の原型となった画期的な試みが着手された時期に向っているのである。

したがって、こういう時期に書かれた「ゴルギアス」は、いわゆる西洋哲学の本流とされる「フィロソフィア」を最初に位置づけたソクラテスの哲学が、高等教育においてどのような役割を占めるべきかを、じかに理解するうえで一つの重要な著作であるといえることができるであろう。

加えて「ゴルギアス」は、プラトンの多くの対話篇のうちでも、とりわけ、政治と道徳と人生を論じたものとしては、「国家」につぐ力作であるといわれ、ソクラテスを死にいたらしめたアテナイの社会を支配するいっさいの通念に対して向けられた「哲学」の側からの怒りと批判の書であり、⁽²⁾「人生をいかに生きるべきか」(492—d, 500—c)を問うものとされているのである。

そこで、これからその「ゴルギアス」を中心にして高等教育における一般教育と哲学の接点を考察してゆくのであるが、そのさい、いわば好事家のするように、歴史的事実の追及ばかりに興味を走らせるのが適当であるとは考えられない。また、当時の社会的背景をぬきにした抽象的な学説や理論構成に終始することが、プラトン理解のためにふさわしいとも思われない。むしろ、プラトンが当時の社会の問題点をどのようにとらえそれにどう対処したかという、彼の観点と探求をとおして、現代のわれわれにも呼びかける親密な対話に耳をすませ、そしてそれに真剣に答えようとするわれわれの態度が要求されるものと考えられるのである。⁽³⁾ そういう対決を試みてこそ、はじめて、先哲の明徹な認識の把握と対処策への英知のひらめきが、25世紀をへだてたわれわれの前に、明星の輝やかなしい光となって

せまってくるのにちがいないと確信するものである。

本稿における考察は、あらかしつぎのように進められるであろう。

- 1 アテナイ社会の伝統的特質とその変動
- 2 伝統的人間観とその推移
- 3 一般教育とソフィズム
- 4 ソフィズムとフィロソフィア
 - i. 「弁論」と「問答」
 - ii. 「最善のもの」

〔注〕 1 田中美知太郎 「ソクラテスとプラトン」 pp. 41~43

（「世界の名著：プラトンⅠ」所収・中央公論社）

2 上掲書 p. 223

3 最も斬新な試みとしては、R. グアルディニ：「ソクラテスの死」
（邦訳、山村直資、法政大学出版局）がある。

1. アテナイ社会の伝統的特質とその変動

生涯をギリシア文学および芸術、社会の研究にささげている世界的な碩学、オックスフォード大学の古典研究家、サー・モーリス・パウラ教授は、ギリシア人の最も特色ある伝統的考え方の中心として、

「……ひとりひとりの人間の価値についてのゆるがぬ信念であった。世界のほとんどの国が、東方の絶対君主制で統治されていた時代でさえ、……ギリシアでは、人間は全能の権力者の道具としてではなく、ひとり人間として尊重されるべきだと確信していた」

ことをあげ、それをつらぬく「自由」の考えを、

「……自分の属する社会のなかで、したいことをする自由、自分のもつあらゆる可能性を開発し、自分の信ずることをなんの気がねもなく語り、だれにもわずらわされることなく我が道をゆく自由を主張した」と指摘し、このような自由が、自己の権利ばかり主張したり、社会を無秩序におとし入れる危険をたえずはらみながら、ポリスが生活のなかで支配の中心としての位置をあくまで失なわなかった理由として、

「自由に対する信念が、法の存在と密接に結びついていたからである」とし、その「法」の特徴を、ギリシア以前のバビロニアの法典やユダヤのモーゼの律法などくらべて、

「紀元前7世紀にあらわれたギリシアの法律は、第1に、全能の君主または神の意志を実行するものではなく、一般の人間の向上を意図したものであったこと、第2に、従来の法律が、王や神官の個人的な意志で勝手気ままに変えられるものであったが、ギリシアの法律は、どんな形にしろ民衆の同意のうえに成立し、彼らの承認なしでは変えられないものと考えられ、第3に、ごく一部の指導者とか神職にある人々のためではなく、社会のあらゆる階層の人々の生命財産を守るためであったこと」にその特徴があるとのべ、さらに、そのような多くのポリスが利害を異にし、時に血を血で洗う激しい戦いを相互にいどみ合いながらも、数世紀にわたり躍動にあふれた命脈を保持してきたゆえんとして、

「バビロニアやペルシアのように、ひとりの専制君主に支配されているという理由だけで多くの異民族が結ばれていた複合民族国家にくらべ、共通の文化や理想によって国家をつくっていたギリシアは、まことに対照的であった。祖国ギリシアが外敵の攻撃を受けるようなことがあれば、彼らはいつでも、みずからの都市（ポリス）の自由とギリシア全体の伝統のために、立ち上った。」⁽¹⁾

というように要約している。

個人の尊厳、自由、法の尊重というような、通常われわれが教科書的な

知識から観念的にルネサンス以降の西洋近代思想の特質としてとらえ、しかも明治以降の日本近代化の有力な推進力として輸入されながらその定着の度合いがいまもって問題とされている、この考え方が、27世紀も昔からのギリシアで「共通の文化や理想」としてうけとられ、しかもそれがたんなる理想主義的な理念や抽象的な命題でなくて、まさしく、躍動する生と活との根源であり、それをおびやかすものに対しては生と死をかけて立ち向うに価するものとされたところにギリシア精神の伝統的特質があるというのである。

このことを念頭において、われわれは、このようなギリシア精神が、程度の差こそあれギリシア全土のポリスの基本精神であることを承認したうえで、それを社会生活のしくみのうちに典型的にあらわすものとして、アテナイの「民主体制」をあげることができるであろう。

古典アテナイの民主体制は、われわれが期待するような平和国家、文化国家のあいだに形成されたものではなく、その発展にはかなりの妥協と曲折とを重ね、多くの試みと反動のくりかえしのなかから成長してきているのである。民主政治の基礎となった「ソロンの改革」（前 594）も、前 7、6 世紀の貨幣経済の進行にともなう、農民の没落を契機として発生した平民と貴族の激しい対立、という新しい時代の動向に適応するためであったというし、狭くてやせた土地で天然資源に恵まれないアテナイが、窮余の策としてあみだしたものとも解されるのである。「海上国家」「商工業と貿易の奨励」という、いわば、今日流におきかえるならば、植民地政策と重工業資本主義経済政策という一見奇妙なとりあわせと並行して、「市民参政の拡大」の策が採用されていることが、解明されているのである。⁽³⁾

それが、「クレステネスの改革」（前 507）を経てしだいに成長し、経済的にも軍事的にも国力の増強がかちとられるまでには、ほぼ 1 世紀の試行錯誤と反動のくりかえしを重ねており、えもいえぬ苛酷な歴史を経て

いるのである。

そのあげく、前 479年にいたって、オリエント流の専制君主の支配するペルシアと20年にわたる戦争のきびしい試練をのりこえて勝利をえ、ついで戦後のアテナイがギリシア全土のポリスを結束する「デロス同盟」の盟主となるにおよんで（前 478年）、自ら選んできた民主体制に対する絶大な信頼と誇りとが、アテナイ市民のあいだでゆるぎない確信として充溢するにいたったのである。

つまり、ソクラテス、プラトンの時代のアテナイ市民の胸裡に描かれる社会像には、アッティカの首都としての姿をこえた、名実ともに 200余の同盟諸国に君臨する、実質上ギリシア随一の海軍力を擁した実力国家として地中海世界における軍事、政治、経済の中心を占めるにいたる、実績をもたらすことのできた、その原動力としての「民主体制」の栄光が、いとも強烈に焼きつけられていたのである。彼らにとってこの輝かしい栄光は不滅の灯火であり、人類すべての尊い遺産として永遠に失なわれてはならないとの気迫さえ抱いたものにちがいない。その黄金時代の強力な推進者ペリクレスは、それについてこう述べている。

「われわれの行なう政治を民主主義という。なんとなれば、われわれの主権は少数の特権階級の人々のものでなく、われわれ市民自身の手中に握られているからである。個人間の紛争を解決するばあい、われわれは、万人みな法の前に平等の権利を有しているのである。ある人物を社会的に責任ある地位につく人として選出するばあい、問題とすべきものは、あくまで当人の能力であり、決して門閥などではない」⁽³⁾

ペルシア戦争の緊張と危機がギリシアの勝利をもって終ってから、アテナイには空前絶後の繁栄がおとずれた。文学、彫刻、建築など後世から驚嘆の的となった数々の傑作については、ここではふれることができない。しかし、ペリクレス時代のアテナイがギリシア全土の知的活動の中心地となり、才能ある人々が自分の才能の尊重されることを夢みてギリシア全土

は言うにおよばず、エーゲ海域のイオニア地方や地中海各地に開拓された植民地からまで、アテナイをめざして集まってきた、ということは、当時の思潮の固有な徴候を理解するためにきわめて重要であると思われるのである。

すなわち、アテナイが知的活動における後進的立場から一挙に先進的、指導的立場に躍進してしまった、ということである。

哲学を例にとれば、自然界の理解を神話的説明によらずに理性をもってすることを最初に試みたといわれるタレスが活躍したのは、植民地ミレトスで 120 年も以前であり、数学については、ピュタゴラスが南イタリアの植民地で教説を広めてから 70 年もの歴史を経ている。アテナイを中心とした学者の活躍はまだ登場していない。ところが、ペリクレス時代になるにおよんで、事情が急に一変してしまうのである。

イオニアのクラゾメナイ出身の哲学者アナクサゴラスがペリクレスの賓客としてアテナイをおとずれ（前 461）、以後 30 年間も滞在したことは、大きな学問的刺激を与えることになった。その自然哲学は新知識としてよく知られ、その学説を記した書物も安価でいくらかでも買えたということである。⁽⁴⁾

コス島出身のヒポクラテス⁽⁵⁾が、従来の医術を医学にまで高めて、自分の手で確かめた具体的例に基いて新しい理論にまでおしすすめ、あくまでも科学的な原則にのっとり仕事を進め、綿密な観察と分類の方法とともに総合的診断の重要性を強調したというのも、この時代のアテナイでのことである。

要するに、世界の新知識や技術や知的活動がアテナイを中心に渦を巻いて動きはじめ、いわゆる新時代の文明開化がせきが切られたかのように流入してきたのである。極端な比喻が許されるとするならば、第二次世界大戦後の ¼ 世紀をもって、G. N. P. において自由世界第 2 位の実績を誇り、アジア最初の万国博の開催によって、より具体的な世界的知識や文化

の交流が一般大衆的に可能になった現代日本の状況を先取りするような事態が、古典ギリシアのペリクレス時代に発生しているのである。

この新しい広域社会の出現は、期せずして伝統的社会観とのあいだの激しい対立を招来せざるをえないであろう。新・旧両観点の相剋は、変転の歯車の回転の速さに応じて拮抗の度合いが増加するものである。その混乱をソクラテスは感受性の鋭い時期に体験しているのであり、「ゴルギアス」の設定の背後にはその変動がからまっているのである。

このような新・旧両思潮の対立という事情にあわせて事態を複雑にするのは、宿敵どおしのアテナイとスパルタの対抗意識の高まりであり、前431年のペロポネソス戦争につながる緊張感の発生である。

この戦争は、ギリシア全土や植民地を二分し、アテナイとスパルタをそれぞれの盟主とする民主制と反民主制の諸国のあいだで戦われた一種の世界大戦であったといわれている。断続しながら27年もつづき、しかも、対外戦だけでなくそれぞれの体制国内での党派間の闘争がからみあって、複雑で苛酷で泥沼のような戦いであった。この戦争について不朽な史書を残したツキディデスによれば、「人間の性質が同じであるかぎり、これからさきもつねに起りつづけるであろうような、多くの苛酷な禍い⁽⁶⁾を生み、「人々の品性を改変せしめる、有無を言わせぬ荒々しい教師」であったということである。

ギリシア人どおしのあいだでひきおこされた、相互の深い不信の情、国土の荒廃、恐ろしい疫病の流行、一進一退する戦局の推移のたびに起される戦争責任者への追及、煽動政治屋の暗躍、暴露戦術、裏切りへの報復、和戦のかけひき、巧妙な殺人武器や新戦術の登場……いかにも現代的様相をおびた、いふなれば骨肉相食むベトナム戦争を連想させるようなものである。

アテナイはこの戦いで敗れ、往時の政治的栄光の座は戻ってはこなかった。それでも過ぎし日の華やかな夢として胸裡を去来する伝統の映像は、

アテナイ市民に残っており、せまりくる暗雲に対する疑心暗鬼の摸索とともに混乱の度はますますつのるばかりであったのである。

「ゴルギアス」は、このようなアテナイ社会に対する、フィロソフィアからの批判の書なのである。

〔注〕

- 1 C.M.パウラ：「古代ギリシア」(Classical Greece の邦訳版) pp. 11~13
座右宝刊行会
- 2 村田数之亮：「ギリシア」 pp. 15~16 河出書房
- 3 前 431~430 冬、追悼演説から
- 4 「ソクラテスの弁明」(26—d) 前掲書「プラトンⅠ」所収
- 5 彼の作とされている宣誓文句の一部は医師の倫理規定として今日でも知られている。

「私はアポロの神にかけて誓う。医術を私に教えてくれた人は、両親にも等しい大切な人と思うことを。そしてこの医術の知識は、必ず次の世代にまで伝えることを。たとえだれに頼まれようと、毒薬の使用はおこなわず、それをそそのかすまねもしない。いかなる家を訪れようと、ただ病人の治療だけに全力を尽し、悪い行ないは絶対に慎むことを。見たり聞いた

- 6 前掲書「プラトンⅠ」 p. 601

2. 伝統的人間観とその推移

われわれは第1節において、ギリシア精神の伝統的特質と、それが古典ギリシアのアテナイのペリクレス時代の「民主体制」における栄光と繁栄のからみあい、および、複雑苛酷なペロポネソス戦争のかもしれない異常な社会事情での変動について、概観を試みてきた。

ついでこの第2節では、古典ギリシアの伝統的価値観がどのような特質をもち、それが「プロタゴラス」のなかでどのように問題視されるかという考察への布石にしたいと考えるのである。

ギリシア精神の人間観や価値観を育てるうえで中心的役割を果たしたのは「ギリシアの神々」であり、しかもそれがヨーロッパや東洋思想の神観念とは根本的に異質の、ギリシア特有のものであることを、フランスの哲学者、E・ジルソン教授は克明にたどりながら、その特質をつぎのように指摘している。

Whatever the real nature of what they designate, these names of gods all point to living powers, or forces, endowed with a will of their own, operating in human lives and swaying human destinies from above.⁽¹⁾

というふうにとらえ、その神々の性質にみられる共通の特徴を、

第1に、生ける力、すなわち人間と同じように生命力をもったもの、しかも「不死」という人間にはおよばない「力」をもつもの、

第2に、世界一般よりも人間とのかかわりの度合いの強い、言うなれば死すべき「人間の生に関係するすべての」力であり、

第3に、各神は、自分の領域においては最高の支配力をもつけれども、他の領域に関しては、それぞれ最高の支配力をもつ他の神の支配に従わなくてはならない、などの3点に要約している。⁽²⁾

つまり、ホメロスの「イリアド」や「オディッセウス」の神々は、前8世紀のころからずっとギリシアの人々に語りかけて、人間の本质や追求すべき価値の難問を解く鍵を与え、抽象的な概念や観念を、人々のよく知っている事件や人物になぞらえて説明をしてきたのである。

そしてその基本的観点として、人間の人間の行為におけるすべての出来事は、たとえそれが天然現象、生理現象、心理現象のいずれとのかかわりであろうとも、その最終的意志決定は、人間としては到底及びもつかない

「不死」なる神々自らの意志決定によるものであるからには、人間は、いかんともしがたい「運命の定め」に承服しなければならない。しかし他面、神々は、生ける人間のもつ各々の力の領域で、それぞれ独立不可侵の力を発揮するのであるから、人間としては運命の定め到来までは、人生の競技場において、渾身の力を発揮して生の祭典をくりひろげる、というところに人間の生の意義がある、ということになるであろう。

この点に関しては、パウラ教授もだいたい同じようである。

「人々にとって、神は到底およびもつかぬほど美しく、人間の知恵では考えられない行動のとれる存在だった。しかし、なんといっても、いちばん崇められたのは神のもつ偉大な力だった」

と述べ、あらゆる種類の「力を崇め」生活の中にそれを発揮することを願い、一芸に秀でることは、とりもなおさず神によって与えられた才能を正しく用いたことであり、神の座に一步近づくことを意味していた。しかし他方、人間はあくまでも人間であり、神のごとくあることを願っても、神ならぬ身であるからには、すべての背後にあって糸をひく運命の神の裁決を引きうけなくてはならない、とするならば、それは矛盾ではなからうか、とも考えられるのである。

けれども、同教授の指摘によれば、実はこの矛盾の自覚こそが、ギリシアの人生観・芸術観を特色づける、躍動するエネルギーと安定した節度の融合をもたらせる根源である、というのである。⁽³⁾

してみると、これをギリシア的ヒューマニズムの原型としてとらえることができるであろう。「イリアッド」が、勇敢な英雄たちの秘術を尽した個人的な対決を語りながらも、そこで展開される価値観には、勝利がほめたたえられるべき栄光でありながら、雄々しく耐え忍ばれた敗北は、それと紙一重の差でやはり輝かしいものとする、そういう種類の人間の高潔さ、勇敢さの賞讃がある。人間は、死が生ける者の語り草になるとき、死を従容として受けいれることができるのだとする、厭世観でも諦観でもな

い独特の人間観の根底にこの「矛盾の緊張の自覚」があると考えられる。

このような、躍動するエネルギーと節度の融合という考え方が、人間自体の諸能力に向けられるとき、いわば無限に拡大してやまない行為や感情の領域を知性が制御するときに、いっそう尊いということにもなるであろう。ここに、ギリシア精神の理想と考えられた「中庸」の特質をもうかがうことができるのである。

ギリシアの人間観形成にこういう役割を果たした神々と、それから神々と人間のかかわりについてのホメロスの伝統は、古典ギリシアの黄金時代アテナイのペリクレス時代もしくはそれに続く時代においても、基本的にはほとんどそのまま継承されているといえることができるであろう。

祭典は依然として人々を結束させる強力な紐帯である。アテナイが地中海の一大強国としての地歩を築きあげるのに並行して手がけられた最初の一大国家事業は、ペルシア戦争で徹底的に破壊されたアクロポリスの丘上のパルテノンの建設であった。パルテノンは、甲冑に身を固め、槍と楯をもつ軍神でありアテナイの守護神であるところの、女神アテナだけにささげられた神殿である。

オリンピアのオリンピック競技会は、依然として神々をたたえるための伝統的趣旨を失なうことなく、ペロポネソス戦争のときですら、スパルタが競技会開催のための神聖な戦争中止期間を守らなかつたために、罰金を課せられたこともある⁽⁴⁾、というし、ソクラテスの死刑さえも、祭礼の期間にあつたために延期されたのであるから、社会の生きた規律としての性格は、ずっと保持されていたといわなければならない。

ホメロスの叙事詩についてこのころに登場する「悲劇」も、ディオニソスの劇場で年に一度の祭りの日に全市民を集めて上演されたもので、「神神と人々とのかかわり」としての性格はけっして弱まってはいない。前5世紀の3大悲劇作家アイスキュロスの「アガ멤ノン」、ソフォクレスの「オイデプス王」、ユウリピデスの「トロアの女たち」などにおいて、そ

の筋立てや神々のとらえかた、人間性への洞察などにおいてそれぞれの違いはあるといいながら、基本的には伝統的人間像につながっている、と指摘されている。パウラ教授は、

「ギリシア悲劇は、結末が必ずしも不幸とはかぎらない。……ときには、打ちひしがれた世界に調和がよみがえるという結末さえある。……しかし内容はきわめて深刻なもの……すべてが極度の緊張のうちに演じられ、……神の前では不安定で、はかなく、危険に満ちた立場にある人間を描くのが「悲劇」だった。

……人間の運命がいかに耐えがたいものであっても、それを莞爾として受けとることを尊いこととするギリシア的信念……人間の苦悩に対する明確な解決は示されていないが、そこには苦悩のすべてがあらわされ、その生じた原因や、いかにしてそれに耐えるべきかが示されている……」⁽⁵⁾

しかしながら、この分野でも思潮の推移の徴候がしだいに表面化してくるのを認めざるをえない。それは、「喜劇」の登場である。

喜劇も同じく宗教的行事の一つとして、ディオニソス祭典当日上演されるならわしのもので、悲劇が同情と理解によって人間を不条理の世界から救おうとしたのに対して、喜劇は、心なごむようなしぐさとふざけた陽気さで人間を解放しようとするところに特色がある、とされている。⁽⁶⁾

ところで注目したいことは、アテナイ第一の喜劇作家、アリストファネスによる「雲」が、ペロポネソス戦争勃発後およそ10年のアテナイで上演されていることである。

「雲」という表題は、劇で一定の間において役者が登場するその合間に、シーンの解説をおこなう「雲のコーラス」からその名をとったということである。⁽⁷⁾雲は、新時代の神として、働かずに自分の知恵だけで暮らしている人たち一切の守護神として取扱われている。

その筋書にまで立ち入る必要はあるまいが、つぎのことは指摘しなくてはなるまい。つまり喜劇作家が、あたかもこんにちの文芸評論家のように、その許された特権でもって政治家、将軍、学者、詩人、知名士、文化人の差別なしに、思いのままに皮肉・諷刺の対象として取りあげたなか、ソクラテスがおかれているのである。そのソクラテスは、前節であげた自然学者のアナクサゴラスと同じように、新しい神をアテナイに持ちこみ、青年たちに革命的な価値観を教えているものとして取扱われているのである。雲のコーラスを前にして、雲以外に神はないことを宣言し、これまで神々の仕業であると信じられていた雨、雷鳴、稲妻などの現象を雲の作用として説明し、これら自然現象の必然的生起の根本原因として青雲のうちの渦巻（デーノス）の名をあげ、世界を支配しているのはゼウスではなくてデーノスであることを信じさせようとするのを、意図的に取りあげて諷刺をしているのである。⁽⁸⁾

ここでわれわれの目に映ずるものは、アテナイ市民の胸中にくすぶる不安と反発の徴候である。民族の伝統とともに培われてきた価値観が、社会的規模の拡大と新知識の流入、それに戦争のひきおこす混乱のなかで大きく揺れ動いてゆくのを察知した、微妙な反応のあらわれである。

〔注〕

- 1 Etienne Gilson: GOD AND PHILOSOPHY pp. 7~8
New Haven Yale University Press.
- 2 上掲書 pp. 9~10
- 3 前掲書 「古代ギリシア」 pp. 17~18
「ギリシア」 pp. 102~104 参照
- 4 前掲書 「古代ギリシア」 p. 125
- 5 前掲書 「古代ギリシア」 pp. 101~102
- 6 前掲書 「古代ギリシア」 p. 102
- 7 田中美知太郎 「ソクラテス」 p. 58 岩波書店
- 8 上掲書 p.58

3. 一般教育とソフィズム

現代イギリスのすぐれた歴史学者、思想史家として知られている、クリストファ・ドウソン教授はその名著 THE CRISIS OF WESTERN EDUCATION で、西欧教育伝統の源泉を古典ギリシアに求め、しかもそれが、特定の階級、たとえばインドのカストや支那の官僚またはエジプトの祭司などのいわば独専形態におちいることなく、

It grew up in the free atmosphere of the Greek city state, and its aim was to train men to be good citizens; to take full share in the life and government of their city.⁽¹⁾

というところに文字どおりユニークな特色のあることを指摘し、このような教育理念が現実に“...which still dominated the English universities and public schools when I was young,...”として生き続けてきたことを証言している。

それにしても、このたびの文部省の大学一般教育改善案における趣旨として、

「大学における一般教育は、過度の専門化による弊害を避け、良識ある市民としての教養を培うため、いわゆる新制大学の重要な理念の一つとして戦後とり入れられたものであるが、20年の経験を経た今日、なお必ずしも大学教育に定着したとはいいがたく……」⁽²⁾

という指摘を連想せざるをえない。

ところで、その一般教育の理念の淵源は、同教授の指摘のように古典ギリシアのアテナイに求めることができるのであるが、それはすでに前節までの考察をもって明らかにされたように、伝統的なアテナイの民主体制とそれを支える神話的伝承と、そのアンチテーゼとして登場する外来の自然哲学思想や啓蒙的新時代の情報を背景とした「新教育」との、激突とい

う、社会の変動と価値観の転換のからみあいの事態においてせまられた一つの解決策であると考えることができるのである。

ソフィストたちの活動は、こういう事情のもとで重要な問題提起をしたのである。つまりアテナイの政治的高揚と社会的繁栄のなかで、有能な市民としての知識・技術を教授することを公言する、私的、職業的教師として登場してきたのである。

ところで、「ソフィストたち」については、このごろ市販されている大学教育課程用の哲学関係の書物での評価にさまざまある。たとえば

「かれらは、自分の祖国に定住することなく、また一定の主義主張をかかげたり、己が信念に固執することもなく、教養と才能にあふれた名声を愛する常識ゆたかな紳士として、諸国をめぐりつつその国々に都合のよい青年たちを、報酬を得ては教育することを己が職業とした一団の人々である。」⁽³⁾

やや穏健なものでも、

「ソフィストたちの思想は、今までのように何か絶対的なものを追求するということではなく、いわば相対的な、よりよき見解で社会や国家を導くことで満足する傾向が出てくることもやむをえなかった」⁽⁴⁾

さらに、

「古き伝統と権威のきずなから人々を解放し啓蒙すべき物知り博士である」

として、啓蒙した功績はいちおう認めてもよろしいとしながらも、

「その啓蒙はたぶんにゆき過ぎであり、また安手でもあった」⁽⁵⁾

というように、どちらかといえば軽くあしらわれている感じがしないでもない。

しかしながら、ソフィストたちをこういう酷評や軽視でもって扱うのは、あまりにも一面的処遇である、といわなくてはならない。なぜならば、いわゆる「相対的」な視点にしても、哲学の歴史的展開を調べれば明

白なように、このころのアテナイでは、イオニア系統のいわば経験主義的説明態度と、エレア派の純論理的傾向との相剋から、一種の懐疑的探求をかもし出す哲学的雰囲気⁽⁶⁾のあったことは、当然考えられることである。さらに、政治的・文化的に他の地方や国々との頻繁な接触によって、アテナイの一般市民にとって、ペルシア、バビロニア、エジプトのような高度の文明もあれば、シッキア、トラキアなど後進性のものもあることについて情報の交換が一般化されるにつれ、国により地方によって異なった生活様式があり、宗教的、倫理的規範に相違があることに、きわめて鋭い好奇心をよせるようになるのは、ごく当然のことといわなければならない。

したがって、ソフィストたちの役割をいちがいにたんなる啓蒙家もしくは軽薄な相対主義者とするのは、当を得ていないのである。加えて、稿をあらためて「ヘレニズム期」における考察でとりあげるように、一般教育の歴史的展開、とりわけヒューマニスティックな体系において *artes liberales* (*liberal arts*) の概念を発展させる素地を提供したのは、イソクラテスなど後期ソフィストたちである。「その偉大な影響にくらべれば、プラトンの教育計画は、その『理想国』と同じく失敗したのである」⁽⁷⁾との極言さえあるほどなのである。

ところで、ソフィストたちの一般教育についての理念はどのようなものであろうか。それについて「ゴルギアス」のなかでソクラテスに対するカリクレスの反論があるのであるが、それをもっとも端的に表明しているといえるであろう。

「ひとかどの人物となって名をあげるためにぜひとも心得ておくべきことがらは、

国家社会におこなわれている法律や規則を会得しておくこと、
公私さまざまな取り決めにあたって人と交渉するとき用いなければならぬ口上を知り、

人間がどんな欲望をもち、どんなことを喜ぶかを知っておくなど、

一口でいえば人さまさまのありかたを十分心得ておく、
ために必要な訓練を受けることによって、(484—d)

生れつきのすぐれた素質を發展させて、

詩人(ホメロス)が男子の榮譽を輝かすべき場所としてあげてい
る^{アゴラ}広場で、自由に大声で思うぞんぶん力づよい発言すること、

(485—d~e)

ということが述べられている。言い換えれば、今日の学校教育が目標とする「民主的な社会のなかで、民主主義の価値と諸方法を信じ、民主的生活に関する良識と能力を備えた人間の教育⁽⁸⁾」というのに通じるものがある。

この理念は、ソフィストたちの独創的なものでなく、かれらも同じくアテナイの伝統的精神もしくは遺産のもとにあることは、あらためて指摘するまでもないであろう。むしろ独創的貢献は、このような市民一般の教育の伝統的理念を土台としながら、新・旧思潮の渦巻く新時代の社会的要求に応じる、意識的組織的な教育課程の編成を志向した、ということに求められなければならないと考えられるのである。教育課程が画期的な編成に至るためには、「ヘレニズム期」のイソクラテスのころまで待たなければならないけれども、すくなくともそれへの布石が敷かれていることに注目しなくてはならない。

それに、ややもすれば俗事を超越し観想的、高踏的であることをよしとする風潮に親しんできたアテナイに、一種独特のムードを持ちこんだのである。軽視され薄給に甘んじ、ときには給料の遅払いや不払いにさえ耐えなければならなかった「ペダゴガス」(教師)の低い地位を、自ら進んでひきうけて職業的教師をもって自任し、公然と金銭を受け取って教育活動をしたのであるからには、よほど特有の魅力を備えていたからにちがいない。イギリスの哲学史家、コブルストン教授の指摘によれば、かれらの公言した一般教育への具体的方策は、grammar, the interpretation of poets, the philosophy of mythodology and religion など、なかんずく

the art of Rhetoric を教授することであった、⁽⁹⁾という。これは重要な転換であるといわなくてはならない。

古典的な教育体系では、体育 (gymnastike) と学芸 (mousike) とが市民としての教育ではきわめて重要視されていた。もっとも、mousike は music に通じるものではあるが、たんなる音楽ではなく精神的陶冶の理想としてアテナイでは解され、「楽器においてよりもむしろ人生そのものにおいて美しい調和と諧律をかなで、いわゆる君子の道 --kalokagathis--⁽¹⁰⁾を実現する方途」が講じられてきた。

それに対して、新たな教科目としてまず grammatike が登場している。グラマティケーといっても、このころまではまだ「文字」もしくは「読み書き」を意味し、せいぜい「言語の生理学的知識、すなわち音声の性質、発生、分類などの学問的考察」⁽¹¹⁾の程度であって、「ヘレニズム期」以降のような文法学者もしくは言語学者ではなかった、と解するのが妥当であると思われる。しかし当時の著名なソフィスト、アプデラ出身のプロタゴラスは、南イタリアのギリシア植民地トウリオイの建設にさいして、憲法起草の重任にたずさわるほどの識者であり、エリス出身のヒッピアスも数学、天文学、歴史、文学、神話学に通じた有数の博識家で、グラマティケーについても科学的探求の先駆者といわれている。そしてこの伝統が、のちに新興の読書階級のためにイソクラテスによって始められた「著述」の意味におけるグラマティケーにつながっていることに留意しなければならない。

従来のアテナイでは、著名な政治家や社会の指導者は自らの考えを書き表わすのを、いさぎよしとしない風習があったようである。⁽¹²⁾それにくらべてソフィストたちは、意識的に新しい教育方法を案出し、いうなれば、教育の一般化、高等教育の大衆化をひきおこしたマス・コミやジャーナリズムの先弁をつけたようなものである。

つぎに、詩や神話、宗教がアテナイの伝統的精神の培養に重要な役割を

演じてきたことは、すでに考察してきたところであるが、ソフィストたちはこの聖域にメスを加えていることに注目しなければならない。輝かしい伝統的遺産の原動力として、いわば無条件に受容してきたものに対して、合理的説明と客観的な批判と吟味がさしむけられたのである。これはたんなる啓蒙ではすまされないものを含んでいるといわなければならない。そのような性質のものであればこそ、かのペリクレスと親交がありその招待で渡来し、30年も滞在して学界や政界に多大の影響をおよぼした、イオニアのアナクサゴラスですら、太陽が灼熱の石であるとの学説を標榜したというかどで不敬罪に問われ、ペリクレスの必死のとりなしでようやく国外退去でことなきをえたのである。そういう性質の合理的解釈と哲学的批判とを、自然現象についてではなく人間の世界にさしむける冒険を、ソフィストたちはあえて試みたのである。これは一つの革命的試みといわなければならない。それが公然と出現したことの裏面には、それを可能にする情勢や世相もしくは社会的要求が存在していたことが暗示されているともいえるだろうし、また、このようなソフィストの挑戦が一般教育のありかたにかなりの波紋を投げかけたことは疑うことができないとも考えられるのである。

さらに、ソフィストたちをもっとも特色づける the art of hretoric についても一考する必要がある。rhetorike は、後期ソフィスト、なかでもイソクラテス学派においてプラトンの dialektike に対立するすぐれた方法論の一つとして確立されたものであり、のちにアリストテレスはその「修辞学」でこれを論争の様式--agnostike lexis-- と著述の様式--graphike lexis-- とに区別しているということである。しかし「ゴルギアス」で取扱われているレトリケーは、論争の様式としての「弁論術」であり、論争、宣伝、説得の技術と解すべきであろう。しかしこれをいちがいに「弱論強弁の技法」として奸智にたけた謀略であるかのようにかたづけるのは、適当ではない。すでに指摘されたことで明らかなように、アテナイ社

会の伝統では、直接民主制が基盤とされ、裁判でも裁判官の役職よりは市民から交替で選ばれる陪審員がかなり重要視されてきた。とすれば、言論の素養は市民生活、社会生活にきわめて密着した要求であり、その技術の習得は一般的教養にとっては必須のものであるばかりでなく、社会で頭角をあらわすための専門教育の一環でもあるかの感じすらするのである。古来われわれの伝統では、「黙して語らず」を美德とし、「巧言麗色」なるがゆえに仁のすくなきものとして軽視し、ことあげするのをはばかりの傾向がないでもない。

さらに、論争や説得が「言うべきことをよく言い、言うべからざることを言わない」ようなものであるためには、かなり高度の知的訓練を必要とすることは、われわれの経験でも明らかなことであり、また、言論を裏付け説得力を強めるためには、広い知識や情報をもたなくてはならないことも言うまでもない。加えて、教育哲学の見地からすれば、この立場は、人間の価値が血統や遺伝的因子によって決定されるよりは、後天的に学習や陶冶によって獲得される領域に属することを主張しているのであり、人間の可塑性に深い信頼をおいているのである。藤沢教授によれば、

「言語能力修練中心の普遍的教養（パイディア）(humanitas)の理念は、人間を人間的(humanus)な状態から、より人間的(humanior)な状態に高めることをめざす、正統な意味における『ヒューマニズム』の一つの水脈をなしている⁽¹⁴⁾」

以上要するに、当時のアテナイ社会における一般教育において、社会情勢の変化と価値観の変動およびアテナイの危機という事態を背景にして登場してきたソフィズムは、その理念においては伝統的基盤に立ちながら、その方法論的アプローチにおいて、きわめて独創的な革命的なものを掲げていたのである。これがただソフィストたちだけのものではなくて、むしろそれを支持する市民層の台頭や拡大があったことも当然考えられるであろう。そしてそれが、伝統を固執する側として黙視するわけにはゆかないほ

ど顕在化してきたところに、一つの重要な問題があるといえるであろう。アリストファネスの「雲」の上演は、そのへんの事情を如実に物語るものである。ソクラテスも、一般の目からすれば、さようなソフィストの一人と目され、そしてアテナイ市民から毒殺の刑を言い渡されたのである。

しかし、師の生をみつめ、師の死を思うプラトンの視点は、明らかにそれとは異なるところにそそがれていたのである。

〔注〕

- 1 Christopher Dawson: THE CRISTS OF WESTERN EDUCATION p. 6 Sheed and Ward, New York.
- 2 「大学設置基準の改正について」(解説) p. 2 文部省大学学術局
- 3 山崎・原・井上共著「西洋哲学史」 pp. 19~20 東京大学出版会
- 4 桂寿一著「哲学概説」 pp. 196~197 東京大学出版会
- 5 佐藤俊夫著「倫理学」 pp. 27~28 東京大学出版会
- 6 c.f. Frederick Copleston, S.J.: A HISTORY OF PHILOSOPHY, Vol. 1, part 1, pp. 101-106. Image Books, A Div. of Doubleday & Co., Inc. Garden City, N.Y.
- 7 ヨゼフ・ロゲンドルフ「ヨーロッパ文学におけるヒューマニズムの伝統」 pp. 97~100 (「大学とヒューマニズム」上智大学、創文社 所収)
- 8 教師養成研究会「道德教育の研究」 p.83 学芸図書
- 9 ibid. F. Copleston, S.J. : A HISTORY OF PHILOSOPHY, Vol. 1. pt 1, p. 104.
- 10 藤井義夫「文献学一般との関係」p.434 (講座哲学大系 (2) 人文書院 所収)
- 11 上掲書 p. 436
- 12 プラトン「パイドロス」(257-d-e)
- 13 前掲書 藤井:「文献学一般との関係」 p. 437
- 14 藤沢令夫:「ギリシア古典期の哲学」 p. 80 (講座哲学大系 (2) 人文書院 所収)